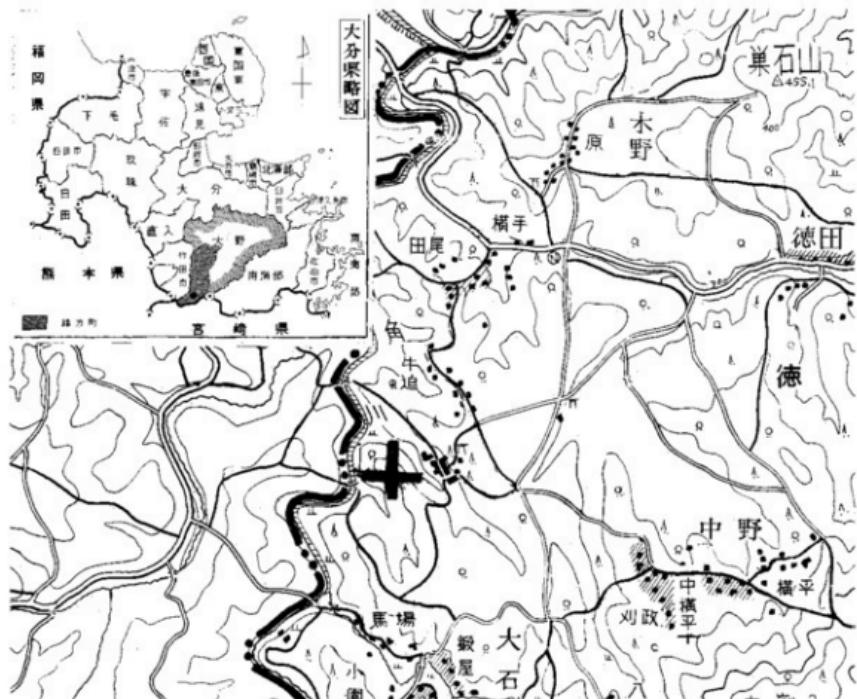


## 縄文式晚期農耕文化の研究に関する合同調査

—昭和40年度 合同調査—

(大分県大野郡猪方町大字大石遺跡)



1966

## 別府大学

## IV 遺 物

### (I) 土 器

大石遺跡出土の土器はその形態から深鉢、浅鉢、それに皿形に大別できるが、その他にわずかに塊が含まれる。主体は鉢形と皿形という極めて単純な組合せを示している。

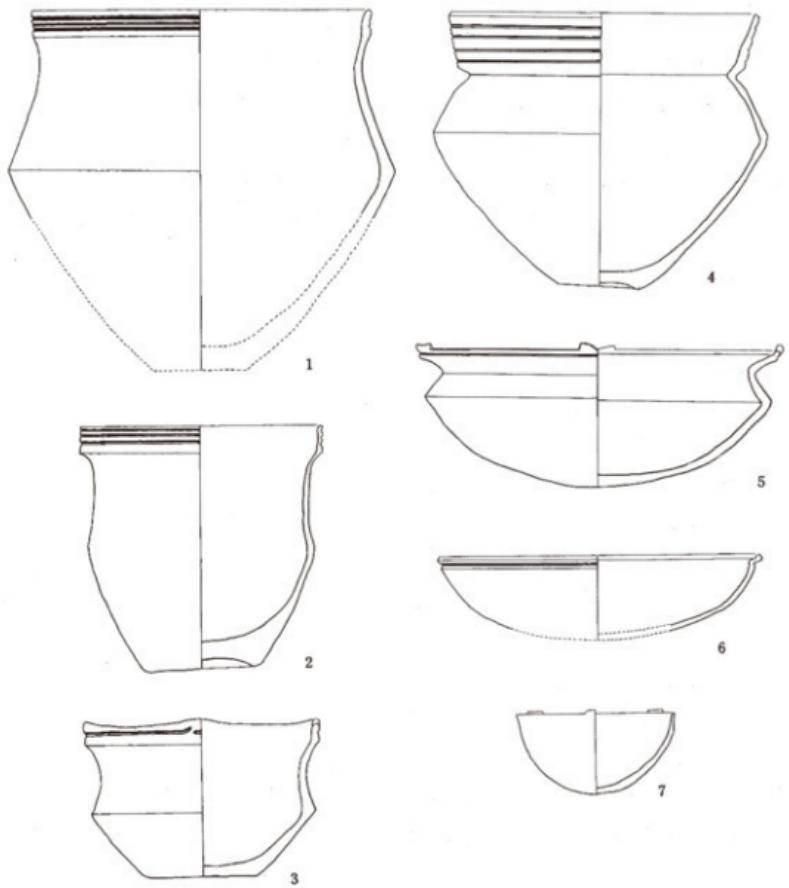
第3図1~4 相製の鉢形土器。器形の上で、口縁部その他に若干の違いがあげられるが、全般的には多くの共通点がみられる。即ち、口縁部は沈線の文様帶で飾られ、頸部とは明確に区別され、段を持っている。腹部はいずれも発達しており、口縁部と同じ、あるいはそれよりも張っており、底部へと大きく屈接している。この腹部の屈接は口縁部の沈線文帯と同様にこの鉢形土器を特徴づけるものである。器面の色調は褐色、あるいは黒褐色を呈して、胎土には砂を含んでおり、胎土、焼成ともにあまり良くない。また器面には、横方向の擦痕が走り、内側にも同様の擦痕がみられるものが多い。

5 口辺部が外反し、頸部、肩部に著しい屈接を持つ丸底の精製の浅鉢形土器である。口唇部に四個の蝶ネクタイをつけ、口辺部直下の内外に細い沈線文が施されている。

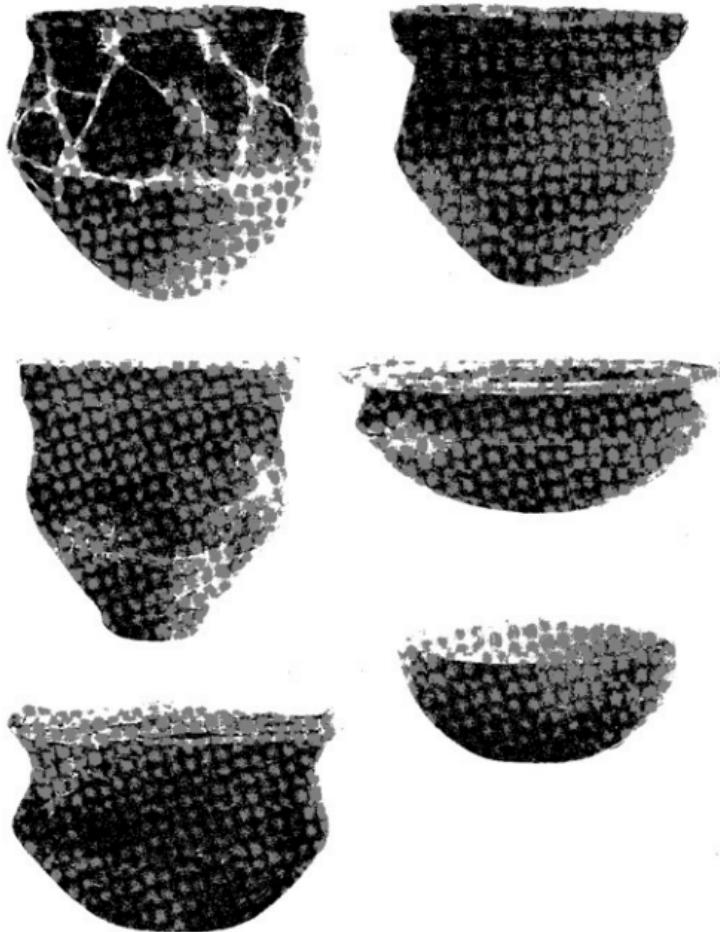
6 精製の皿形土器である。これは口辺部直下に沈線によるくびれ部ができているが、肩部には屈接がなく、なだらかな曲線を描く丸底である。

この2点の精製土器はいずれも、内外とも笠による横方向の調整がなされており、全体に黒色の光耀を持つほどに研磨はいきとぞしている。胎土、焼成共に良好で、しかも極めて薄手の焼である。器面の表面はこし粘土が使用されている。黒色研磨の浅鉢形、皿形土器の多くの土器片は口縁部、頸部、あるいは肩部というように、屈接した個所でわれている。これは、土器の製作の際、別々につくられ、貼り合せたためであろう。

7 口唇部に三鰐の突起をもつ小さな塊である。焼成、胎土は、皿形土器ほど良好ではないが、器面の調整はよくなされており、色調は内外共に赤褐色を呈している。



第3図 繩文晩期大石式土器（I）実測図



第4图 梅文晚期大石式土器（II）

## (II) 石 器

本遺跡出土の300点余の石器の約七割は耕作具と考えられる扁平打製石斧と、収穫具と想定される石庖丁形石器で占められている。これらは大石遺跡の性格を端的に示すものとして大いに注目される。

扁平打製石斧はその形態、擦痕等から次の二種に大別できる。

第5図1～3 幅5、6cm、長さ1、2cm前後の比較的大形なグループで、扁平な安山岩の周辺を両面から粗く打欠いて形を整えている。この比較的大形の扁平打製石斧は、厚みがあることも加って、重量があり、縱断面はどちらか片方に彎曲しており、しかもこの石器の刃部と考えられる先端は平坦をなすものが多いなどの共通の形態を具備している。また、基部の両側辺に簡単なえぐりこみを観察できるものがあり、これは着柄に関係あるものと思われる。刃部の使用痕と考えられる擦痕についてみると、主として彎曲している外側に観察され、それらの多くは長軸に沿ってであるが、擦痕の長さや幅には統一性は見られなく、横方向や斜め方向、あるいは脇部にも擦痕が認められるものもある。破損品が著しいのは、使用が多かったことと、対象物にかなり固いものがあったことを示すのであろう。結論としてこの大形の扁平打製石斧は、刃部に垂直に交わるような柄を着けて使用した鉈と考えるのである。

4・5 同じく扁平打製石斧と呼ばれているものであるが、全体的に小形なグループで、先端部が幾分尖ったものが多くみられる。縦断面はほとんど真直ぐで、厚さも薄く、加工も比較的細かくいきとどいている点等がこの石器の形態上の特徴とすることができる。先端及び、それに接する斜めのエッヂの部分に刃部が形成されている。このことは、このグループの石器が、小形で重量のない点と考え合わせると、対象物に対して直角に働きかけるよりも、むしろ斜め、あるいは平行な使用を考えた方がより合理的な働きを示すのである。即ち、手もちの浅耕用の土掘り具、あるいは栽培植物等の根を切る道具とすべきものと考える。

扁平打製石斧に共存する石庖丁形石器は、その素材から二つのタイプに分類できる。

9・7 小さな扁平な安山岩や結晶片岩を素材にして、周辺から小さな加工を施している。全体の形は半月形もしくは隅丸方形をしたものが多く、断面の厚さは薄い。刃部は石庖丁形石器の長軸に沿った側辺に観察され、この部分には特に小さく整った加工が施され、他の側辺と区別できる。短軸の側辺に小さな凹みがつけられたものもある。弥生時代に普遍的にみられる石庖丁の形態と極めて類似しており、その用途についてはやはり収穫具とすべき石器である。

8・9・10 サヌカイトや安山岩の縦長の剥片を素材として撰んでおり、素材の剥片のもつ鋭いエッヂをそのまま刃部として利用している。二次加工はごくわずか見られるが極て薄い剝離である。

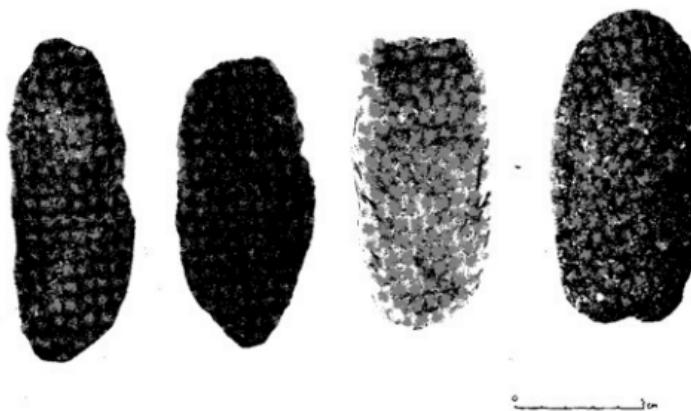
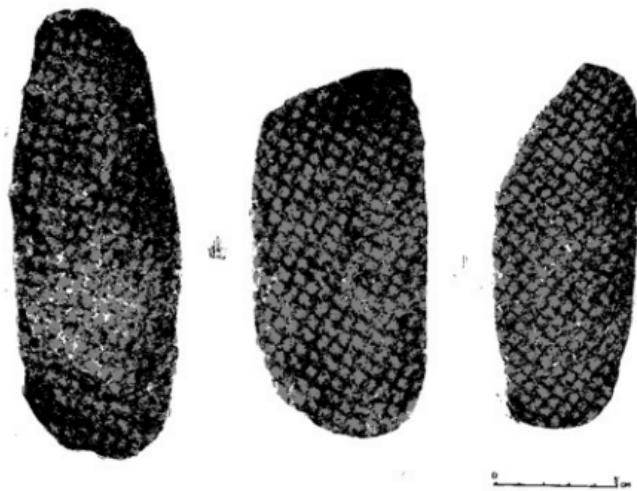
全体の形は細い長方形をしており、刃部は直線をなすものや、外ぞりを示すものもあるが、内ぞりをしたもののが比較的多い。鎌に類似した形態をそなえており、用途も恐らく同様と考えられる。

11 大きくて比較的扁平な安山岩を素材とした石皿である。欠損しているため、正確な形は知り得ないが、恐らく楕円形をしていたものと思われる。側辺は表裏から大きく打削されている。表面の中央部には長軸に平行な小さな擦痕が残されており、わずかに凹んでいる。

12 磨石。安山岩の棒状の礫で、四面を磨石として使用したらしく、縦、あるいは斜めの擦痕が著しい。折れた面と反対の一端は、たたき石として用いられたためか周囲に大きな剥離があり、中央部は、つぶれ、わずかに凹んでいる。石皿とセットをなし、穀物をすり潰す道具であろう。



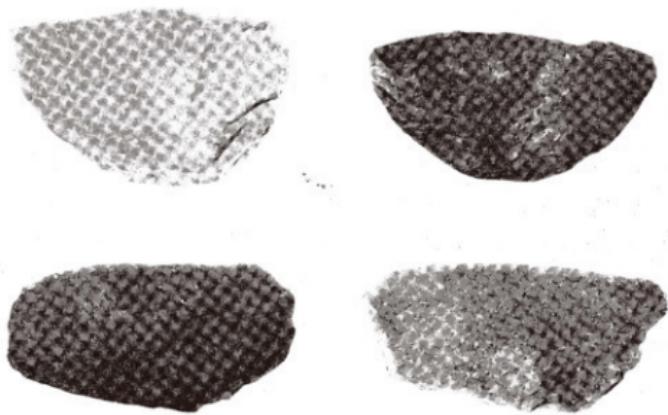
第5図 石器実測図 1～5 扁平（鋸形）石器 6～10 石包丁形（鎌）石器 11 扁平石皿  
12 棒状磨石



第6図 扁平(礫形)石器



0 5 cm



0 5 cm

第7圖 石包丁形(錐)石器

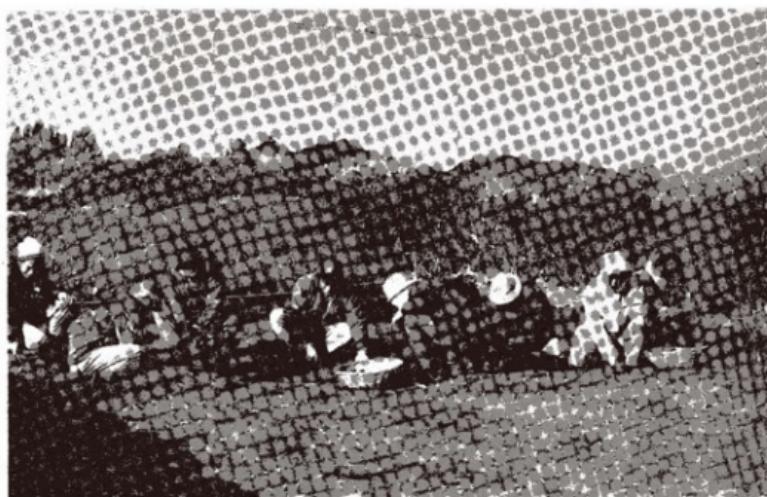
## V 縄文晚期における農耕の可能性

近時縄文晚期農耕の可能性について考察するとき、きまって農具と考えられる扁平打製石器の一群が報告される。最近まで、斧と通称されたこれら扁平石器は、たしかに手斧的特徴をもつものである。この扁平石器の分類が、中国西安半坡遺跡の報告によって機能別に識別され、それを土俗資料により、用途が図示された。半坡の石器は確実に農具とみるべきである。この扁平石器の一群は、かつて、八幡一郎教授が、斧（Axe）と手斧（Azu）に分類して考察した一連の道具である。大石遺跡出土の石器群の大部分は、この手斧的性質をもつものであり、しかもその量は非常に多くそれらの石器は使用痕や、手擦れ、又は使用により半折したものも少くなく、扁平石器の大量使用が指摘される。したがって、この石器類は確実に土を掻く道具であることに疑問をもたない。しかしこれらが半坡遺跡の如く農具と分類できるであろうか。幾分の相異はあるが、大石出土の石器は、半坡において分類されたと同様機能別に分類されることは確実で、開墾、耕作に使用される石器と考えてよい。

さてこのような石器の大部分は打製で、先端など使用による磨耗部を残すが、一部には局部磨製又は、全磨の出土例も多い。もし打製扁平石器が晩期以前の時期にあっても、それは量的に問題にならぬ。したがって、この扁平石器の一群を縄文晚期の農具と考えることには疑いないことになる。しかも晩期遺跡には非常に普遍的に存在するこの扁平石器は、共通のものである。おそらく弥生式時代の農耕にもこの石器の残存は顕著であるはずである。

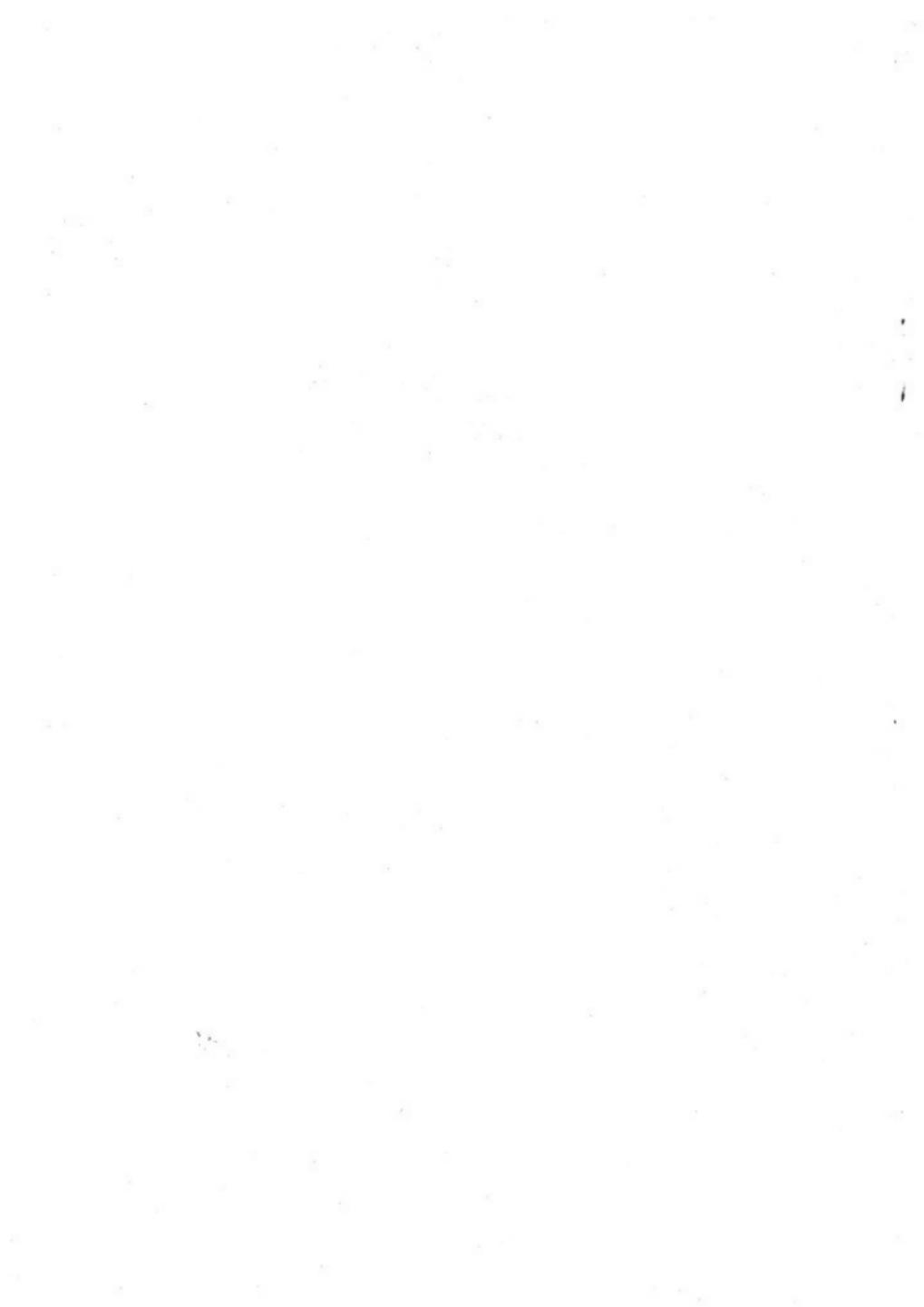
農耕の問題を考える有力な石器の一つに、石刀、陶刀（石包丁、土製包丁）、石鎌などの収穫具が必要であるが、これも彼我の比較資料として符合を合すことができる。更に石臼や磨石による食糧加工の方法も考えられるが、平坦な臼に、長い擦棒の組合せなど、これ又中国や、中近東にみる古代農耕の生産資料と合致する。石器からみた大石遺跡は疑う余地もなく農耕集落を想定せしめる。そして、この農法が湖出に富む台地に形成されたことと併せて、やがて水田耕作（稻作）への基礎的稻以前の農耕のはじまりを考えるのに充分な資料ともいえる。その状態は、中国半坡の如く粉食をもとにした焼烟農耕社会ではなかろうか。平臼と棒状擦石は、それを実際にあらわしたことになる。

さて、このような石器の考察に加えて、集落の問題があるが、これについては、あまり確実な資料を得ないまま第8次の調査を終了した。今後、集落、墓地、そして作物など、各方面的調査研究がまたれる。（賀川・橋）



第8図 調査風景





## 目 次

### I 繩文時代農耕文化起原に関する研究調査

(1) 調査目的

(2) 昭和40年度調査要項

### II 大石遺跡

### III 調査の概要

### IV 遺 物

(1) 土 器

(2) 石 器

### V 繩文式晚期における農耕の可能性

#### 調査団の構成

代 表

賀 川 光 夫

#### 東京大学

教 授 泉 靖 一 文化人類学

助 手 松 沢 亜 生 文化人類学

#### 東北大学

教 授 石 田 英 一 郎 文化人類学

助教授 芹 沢 長 介 考 古 学

助 手 林 謙 作 考 古 学

#### 別府大学

教 授 賀 川 光 夫 考 古 学

教 授 林 章 東洋史学

助教授 今 永 清 二 東洋史学

講 師 鈴 木 重 治 考 古 学

講 師 後 蘭 重 己 日本史学

講 師 河 野 房 夫 日本史学

講 師 志 堀 嘉 夫 西洋史学

助 手 橋 昌 信 考 古 学

研究員 岩尾松美 考古学  
研究員 白井昭一 技術  
九州大学  
教授 鏡山猛 考古学  
教授 永松士巳 農學  
助教授 岡崎敬 古考古学  
助手 小田富士雄 考古学  
長崎大学  
教授 安中正哉 人類学  
助教授 内藤芳篤 人類学  
竹田高校  
教諭 鳥��孝好 考古学  
小富士中学校  
教諭 阿南一郎 考古学  
綿田中学校  
教諭 羽田野一郎 考古学

#### 協 譲

諸方町（町長西進）・同町大石部落

緒方町教育委員会（教育長後藤英雄）

本研究は民主主義研究会より東北大学日本文化研究所石田英一郎教授に交附された  
たく「日本文化の源流にかんする研究」のための研究費による研究の一報である。

# I. 縄文式時代農耕文化起源に関する研究調査

## (I) 調査目的

九州の屋根、阿蘇山より、東流する九州第二の河川、大野川流域には、渓谷を狭んで、段丘が顯著に発達し、遺跡が多い。この地域の遺跡のうち、稻作又は稻作以前の農耕文化について文化人類学又は考古学の立場より調査の必要を感じたのは、縄文晚期大石遺跡他多数の遺跡から農具と考えられる石器多数が、組合せて出土することである。近時稻の栽培起源又は稻以前の農業については、縄文式文化終末期（晚期）又は後期に求める学者が多い。しかし、それは微弱な資料や、偶発的な発見から飛躍したもので、決め手になる資料の一貫性を欠く。たまたま大石遺跡は、広大な段丘上に位置した晚期初頭の有望遺跡で、出土遺物が一貫して農具と考えられる。多分日本に農耕をもたらした生産技術は中國大陸の牧畜、農耕社会であろうが、その中国において、近時、土俗資料の考証から農耕生産の石器多数が発見されている。大石遺跡出土の石器は、そのような中國原始農耕の生産技術と符合が合致することから、わが國農耕文化の起りを縄文晚期と考えることが可能となる。勿論、本邦農耕の起りを、その影響力の強い九州のみに求めるのは問題があるし、この解明には韓半島南部地域の原始農業を考慮する必要がある。大石遺跡にみる縄文晚期上器の研磨土器が、南鮮において、黒陶と考えられる同一系式が明かとなり、彼我の文化の共通性を指導することができた。そのように、日本、南鮮の農耕起源が同じ時期に認められるとすれば、そこから原始農耕に対する眞の考察ができる。たまたまこの農耕文化の発展、即ちその起源に関する研究に、文部省民主主義研究費の交付を得て、40年度の学術調査となった。本概報は、その調査成果である。

## (II) 40年度調査要項

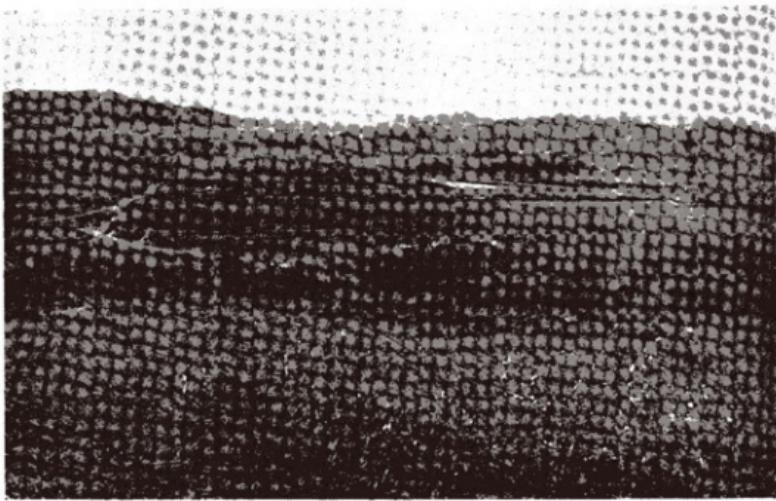
大石遺跡は、阿蘇山や、姫島のように豊かな黒曜石が産出する地域に近い。黒曜石は、古代の人類にとって必要な石器の原材である。そればかりか、大石遺跡附近の山には石器の原材となる安山岩や、頁岩の産出に富む。そのせいか、発達した河岸段丘上に旧石器時代や、縄文時代の遺跡が多い。その集落の一つ大石遺跡には、礫を加工して、鎌形や、鋤形に整えた遺物が多数出土していた。このように、農業生産の道具とともに、大石遺跡では、集落遺構と墓地などの問題を明かにする必要があった。40年度調査では、農具として多数遺物の発見に大きな収穫をあげたが、集落構造についてはまだ不充分であった。しかし墓地の一部が、カメ棺として発見され、本遺跡が広大な台地上に位置する集落、墓地群であることが知られた。住居遺構の存在は今後の調査にまつことにして、この広大な面積の台地が一大集落であることには間違いない。多数遺物とカメ棺の発掘から本邦農耕文化の考察を一步前進せたことは注目すべきであった。今後の調査から花粉分析、炭素C14などの化学的研究成果をまち、年代や生活環境を研究することが今後の課題である。

## Ⅱ 大石遺跡

阿蘇山の東、九州と接する農後水道附近まで、熔岩がみられる。阿蘇の熔岩と降灰によるものである。この熔岩は比較的軟質の凝灰岩で、水流による侵蝕は容易である。熔岩台地は、東に延びて集まる河川により左右広大な段丘を形成し、その段丘の熔岩堆積面には豊かな湧山をみる。泉に恵まれた段丘は、深い谷をはさんで隣りの谷につづき、それぞれ一段丘は、適當な大きさでまとまる。一段丘に一つの遺物包含地が存し、それが一つの集落形成とみられる。この段丘は前述の如く多數の石器材料に恵まれて、遺跡が多い。

大石遺跡は、大野川の本流から分かれて、祖母山麓に発達した河岸段丘で、足下を大石川が深い谷をつくる。この大石台地は熔岩（凝灰岩）を基礎に、その上方に赤土と黒土が厚く堆積する。この上二枚の土層も熔岩同様火山の噴出降灰で、この台地は火山の年譜を一枚一枚の地質層位に求めることができる。この中赤土上面は帶水層となり、谷の側面に泉がみられる。又、赤土上面、黒土の堆積があるが、この下部において遺物の包含がみられる。表面乾燥した地層と考えられるこの台地は、水の恩恵を限りなくうけることができる。この台地に、縄文晩期、農具と考えることの可能な石器群を土器とともに発見したのは、大野郡小富士中学校教諭阿南一郎、綿田小学校教諭羽田野一郎の両氏であった。

当時、本邦考古学研究の一課題は、稻の栽培の起りと稻以前の農業などであったため、ここに、両氏発見の遺物は非常に興味をもたらされた。その後、昭和35年8月と37年8月の二度、別府大学考古学研究室の発掘がおこなわれた。その結果、黒色研磨土器と共に石包丁形石器や扁平磨製石器が多く出土し、近時調査報告された中国各地の古代農耕遺跡の耕作具と符合する結果となった。そして本遺跡の遺物包含層が相当に広く、大きな集落を考える必要があった。かりに稻以前の農業が本邦に存在可能とすれば、縄文晩期初頭、或は後期中葉を逆のぼることはないであろう。遺物、特に石器のなかで、農具と考えられるものと、縄文をころがす技術の消滅した黒色研磨土器の組合せは、縄文晩期初頭が一応の限界である。ここに大石遺跡の研究の重要な課題があるのである。40年度調査は、更に具体的資料の検討を主体として、広く発掘がおこなわれた。遺物については別項にて概報する。



第1圖 大石遺跡全景

### III 調査の概要

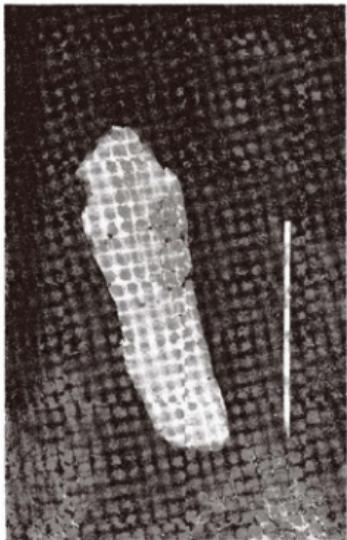
大石遺跡の調査は、整理の都合上35年度試掘を第1次調査、37年度を第2次調査とし、40年度を第3次調査と呼ぶことにした。第3次調査は、1、2次調査に隣接した地域をえらび、ここを中心にして広大な調査区の地区割りをして、調査区の整理をした。40年度調査の調査区は、A地区2、3区及び15区、a地区は0、1、2区及び15区にわたり、それぞれ方6mの調査区を設定したので、全体では方48平方mに及ぶ広大なものになった。

大石段丘における遺物埋蔵の層位は、第1、2次調査を含めて検討を加えてきた。下部に凝灰岩の熔岩があり、その上部は、凝灰岩のばい乱土層に続いて、赤土の堆積をみた。その上部は黒色土壌で、地表に接した場所は、耕土となり、灰黒色に変質している。この層序は台地の全体にわたって同じように堆積するが、北西側にしたがい黒土の堆積が厚い。したがって、現在平坦にみえる遺跡は黒土を除いてしまえば、北側に向って傾斜することになる。この台地に集落を形成し、農具と考えられる石器、単純な黒色研磨土器が発見できるのは、赤土の直上であるから、当時の生活面は、赤土直上、わずかに黒土の中に含まれることになる。したがって当時は、北に向ってわずかに傾斜した地帯に生活址を考えることができる。現在遺物のもっとも多量に出土した南側は、農地構造改善によるブルトーザにより更位をみつつあるので、遺跡の概況を最もよく知ることができるのは、中央部から北側になるとわかる。したがって上層の黒土は1m以上にわたって掘開する心事がおこってくる。又黒土の下部に若干の弥生式中期遺物が散布し、数片の弥生式土器と、磨石器の発見がある。したがって、層位的には、弥生式時代と、縄文晩期に大別されは、弥生式（城越式）の散布の下部において有力な縄文晩期遺物が包含される。

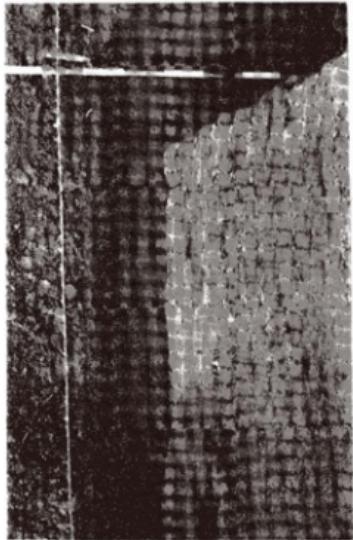
第5図



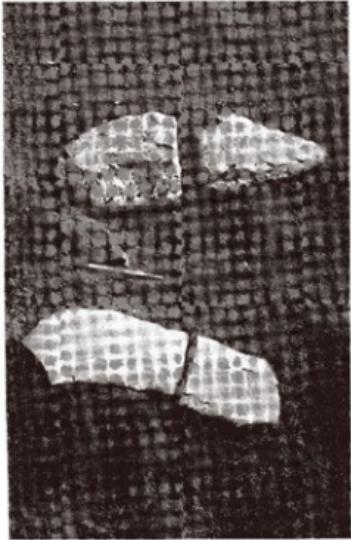
浅鉢出土状態



石包丁形(縫)石器出土状態



層位



石包丁形(縫)石器出土状態



